
リアル鬼ごっこ ～もう一つの結末～

逃げ水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル鬼ごっこ ～もう一つの結末～

【Nコード】

N7611D

【作者名】

逃げ水

【あらすじ】

リアル鬼ごっこに巻き込まれた一人の少年。少年は7日間逃げ切ることが出来るのか。

変わらない朝

「ふあゝ」

朝の寒い空気によりいつもより早く目が覚め、寝ぼけ眼で佐藤 智哉は時間を確認した。

時計は6時ちょうどをさしていた。

「まだ6時か。」

智哉は体を起こし、窓から空を眺めた。

空は何処まで青く透き通り雲ひとつ無い快晴だった。

それと対称に智哉の顔は晴れなかった。

「……いつもと変わらない朝……か。」

溜め息をつくとき智哉は学校に行く準備を始めた。準備を終えリビングに向かう。

すでにリビングでは家族が和気あいあいと朝食を食べている。

智哉がリビングに入ると、それに気付いた妹が挨拶をしてくる。

「おはよ、お兄ちゃん。」

「ああ、おはよ由里。」

満面の笑顔で挨拶をする由里はまるで向日葵のようだった。

しかし、智哉はその笑顔に笑顔で挨拶する事が出来なかった。

それは、由里の親である佐藤 章谷と佐藤 史恵が、まるでどぶねずみを見たかのような顔を智哉にしたからである。

智哉の両親は幼い頃に交通事故により亡くなり、祖父によって育てられた。

しかしその祖父も智哉が10歳の時に他界した。それから8年、この家にいるがいつもイジメられた。

智哉は自殺も考えた。

しかし、そんな智哉を支えてくれたのは由里だった。由里がいたから今の智哉があった。

それでも家には居づらかった。

「ごちそうさま。」

無表情で言う。智哉は直ぐに玄関に向かい、家から出ていった。

「待つてよお兄ちゃん、由里も行く。」

追い掛けるように由里もランドセルをしょい家を出て行った。

「お兄ちゃん、今日は家庭科でお菓子作るだよ。お兄ちゃんも欲しい？」

「いいよ。それより火傷するなよ、由里はおっちょこちよいだから。」

智哉はいじわるな返事をした。

「私おっちょこちよいないもん。それにもう3年生なんだからそんなことしないよ。」

由里は怒りなが返事をした。

「はいはい。」

智哉は微笑んで言った。こんな会話が智哉にとって幸せだったからだ

「あゝ、また私の事笑って馬鹿にする。」

しかし由里はその微笑みを別の意味に解釈した。

クラスに入り自分の席に座ると1人の男子が智哉に寄ってきた。

「おはよ、智哉」

「おはよ、雅人。」

雅人と呼ばれた少年は、智哉の小学校の頃から友人、つまり親友である。

「あれ？小夜は。」

「小夜なら今日は休みだぞ。」

「へー、あの小夜が。」

小夜というのは、雅人と同じく小学校からの友達である。バスケット部に所属していて、元気の塊みたいな女の子である。

「いや、普通だろ。あんなことが発表されれば。てゆうか元気なお前の方がおかしいよ。」

「なんでだよ？」

「あれ？お前何も知らないのか。」

「だから何だよ。」

すると、雅人の顔が真剣な顔になった。いや、哀れむような表情だった。

「今日から3日後、鬼ごっこが始まるんだよ。」

「鬼ごっこ？」

智哉にとっていつもと変わらない朝、変わらない日常。それは脆くも崩れさっていった。

変わらない朝（後書き）

アドバイスや感想があったら是非書いて下さい。

ふざけた発案

「鬼ごっこ？鬼ごっこがどうかしたのかよ。」

智哉が鬼ごっここと発言するとクラスが騒がしくなった。

その騒ぎに気付き周りを見回すと、クラス全員が自分を見て友達と話しあっていた。

その中で、智哉はある事に気が付いた。

全員が憐れみの目で自分を見ていた。

その事に智哉は不思議に思った。

しかし、その答えはすぐに明らかになった。

「リアル鬼ごっこ。今日テレビでやってた。」

「それが小夜が休んだ理由か。」

「・・・殺されるんだよ。全国の佐藤と名のつく人が。」

「・・・・・・はあ？」

雅人の言葉は何が何なのかさっぱり解らなかった。

ただひとつだけ解った事がある。

自分は殺されるという事だ。

「な・・・何だよそれ！」

「今日から3日後に始まり、期限は7日間。その間、佐藤と名のつく人達は逃げ続ける。逃げ切れればどんな願いでも叶えられる。ただ鬼に捕まれば殺される。」

智哉はあまりの理不尽に驚愕した。

何故佐藤だからといってそんな事をしなければならぬのかに。

「ふざける！！何だよそれ、何でそんな事しなきゃなんないんだよ。」

智哉は怒り怒鳴った。

「落ち着け智哉。」

「落ち着け？落ち着ける訳ないだろ、殺されるかもしれないんだぞ。あゝそうだよなお前は佐藤じゃないもんね他人事だよな。」

「智哉！！！」

取り乱していた智哉に雅人が怒鳴った。

クラスが一気に静まりかえった。

「確かに、お前から見れば俺は他人事かもしれない。でも、俺はお前も小夜も生き残って欲しい。だって俺ら親友だろ。」

智哉は驚いた。

雅人が泣いていたからだ。

そして自分が失言した事、本当に心配してくれている事に気付いた。

「雅人。俺、絶対に生き残るよ。」

「当たり前だろ。」

するとクラス全員が智哉を応援してくれた。

智哉はもう一度心の中で誓った。
絶対に生き残ると。

学校から家に帰ると直ぐに新聞を読んだ。

そこには大きな見出しでリアル鬼ごっこが書かれていた。

内容は鬼ごっこのルール、鬼の格好、そして発案したこの国の国王の言葉が書かれていた。

テレビをつけても、どの番組もリアル鬼ごっこの特集しか放送していなかった。

テレビを消し自分の部屋に戻りベットに横たわると、考え始めた。
どうやったら生き残れるか、大切な人を守るか。

どうやら眠ってしまったらしい、窓から見える空は既に真っ暗だ。
そして気付いた。

下の階が騒がしい事に。多分例の鬼ごっこについて話しているのだろう。すると、親の話し合いの声とは別に階段を駆け登る音が聞こえた。

音をたてた犯人は智哉の部屋のドアを開けると智哉に抱き着いた。

「お兄ちゃん！」

「由里。どうした。」

抱き着いた由里は頭を智哉の胸に押さえ付け、今にも泣きそうな声で話し始めた。

「お兄ちゃん、私たち死んじゃうの！？鬼に捕まって死んじゃうの？私まだ死にたくない。」

「大丈夫。由里は絶対に兄ちゃんが守ってやるから。」

そう言つて、頭を撫でてやり由里を落ち着かせた。

「本当。本当に本当。」

涙目で由里は見上げてきた。

「ああ、まかせろ。」

智哉は微笑みそのまま由里を連れてリビングに向かい夕食を取る事にした。

リビングでは今だに由里の両親が討論を続けていた。ただそれは、討論ではなくこの鬼ごっこに対しての文句の言い合いだった。

智哉はそれを無視して夕食を取り始めた。

するとポケットに入っていた携帯電話が鳴り始めた。

いらついで由里の親は智哉にうるさいと怒鳴り付けた。

智哉は適当に謝り、携帯を確認した。

携帯にはメールが一件届いていて贈り主は雅人だった。

内容は、明日学校を休んで小夜の家に来いとのことだった。

作戦会議（前書き）

キャラ紹介

佐藤 智哉（18）

顔はそこそこ美形。
へ。

両親を幼い頃に亡くし、親戚の佐藤家

雅人、小夜とは佐藤家に来てからの親友。

響灘 雅人（18）

智哉の親友。

顔はかなりのイケメン。眼鏡が特徴。

佐藤 小夜（18）

智哉の親友

腰まで届く長く綺麗な黒髪

顔は学園内トップの美女

作戦会議

翌日、智哉は雅人のメールどりに小夜の家を訪ねた。

呼び鈴を鳴らすと、幼なじみの小夜がドアを開けてくれた。

小夜は学園内でもかなり美人に入るのだが、今では目の下にくまを作り、疲れから顔がやつれせつかくの美人がだいなしになっている。家の中に上がって直ぐ小夜の部屋へ案内された。するとそこには、既に来ていた雅人がいて紙の前で考え込んでいた。

「早いな、雅人。」

声を掛けてやると雅人はやっと気が付き挨拶を返してきた。

「よう、遅かったな。」

「で、用事ってなんだ？」

雅人に用件の内容を聞いたたら、始め驚いた顔をして次に呆れた顔をしてため息を着いた。

「作戦会議だつて。」

智哉の問に答えたのは、飲み物を運んで来た小夜だった。

「作戦会議？例の鬼ごっこのか。」

「そうだ。・・・まさか無策で挑もうしていたなんてな。」

「うるさい。」

呼び鈴を鳴らすと、幼なじみの小夜がドアを開けてくれた。

小夜は学園内でもかなり美人に入るのだが、今では目の下にくまを作り、疲れから顔がやつれせつかくの美人がだいなしになっている。家の中に上がって直ぐ小夜の部屋へ案内された。するとそこには、既に来ていた雅人がいて紙の前で考え込んでいた。

「早いな、雅人。」

声を掛けてやると雅人はやつと気が付き挨拶を返してきた。

「よう、遅かったな。」

「で、用事ってなんだ？」

雅人に用件の内容を聞いたら、始め驚いた顔をして次に呆れた顔をしてため息を着いた。

「作戦会議だつて。」

智哉の問に答えたのは、飲み物を運んで来た小夜だった。

「作戦会議？例の鬼ごつこのか。」

「そうだ・・・まさか無策で挑もうしていたなんてな。」

「うるさい。」

考えなかった訳ではない。ただ色々あったためにたいした考えが浮かばなかっただ。

「そこでだ。一人で考えてもたいした案は浮かばない、しかし三人ならばいい案も浮かぶという訳だ。」

言い終えた雅人は、小夜が持ってきた飲み物を飲むとまた考え込んだ。

立ちっぱなしだった智哉は、小夜に言われ座った。

「二人ともルールは覚えているよな。」

智哉と小夜は黙って頷いた。

「よし。早速案をだしてくれ。」

「おい！お前は無いのか。」

「だから作戦会議をするんだろ。」

こんなに頼りない親友は始めて見た。

「えっと、鬼に見つからないように隠れるのはどうかな？」

小夜は俺達の会話を無視して案を出した。

「それは無理だ、相手にはゴーグルがある。どこに隠れていてもばれる。」

「それだつたら小道より大通りのほうが良さそうだな。他の人も障害になるし。」

そして智哉達の会議は続いた。

「よし、結論としてなるべく人がいなさそうな道を使うか、大通りを使うという事だな。」

雅人がまとめように言った。

「……たいした案は出なかったな。」

智哉はため息混じりに言う。

「……明日、始まるんだよね。私殺されちゃうのかな。」

そう言う小夜はもう泣きそうになっていた。

「そんな事ない！絶対に生き延びるだ。」

そう。こんなふざけた鬼ごっこ死んでなるものか。

智哉は小夜を励ますように、自分に喝を入れるようにそう言った。

しかし、時間は刻々と過ぎていく。

明日の深夜いよいよリアル鬼ごっこが開催され全国の佐藤さんが殺されないために、必死に逃げる。

リアル鬼ごっこ開始まであと28時間

作戦会議（後書き）

感想、改善点、アドバイスを出来れば下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611d/>

リアル鬼ごっこ ～もう一つの結末～

2010年10月9日03時16分発行